

**天野篤氏『この道を熱く生きる』**

●順天堂大学教授・天野篤氏講演から！

22日に行われました浦高同窓会の講演会『この道を熱く生きる』(講師:天野篤順天堂大学教授)のお話を綴ってまいりましょう。

\* \*

天野 篤(あまの・あつし): 順天堂大学医学部心臓



血管外科教授、4月からは同病院院長。1955年埼玉県生まれ。74年埼玉県立浦和高等学校卒業。83年日本大学医学部卒業。新東京病院心臓血管外科部長、昭和大学横浜市北部病院循環器センター長・教授などを経て、2002年より現職。冠動脈オフポンプ・バイパス手術の第一人者であり、12年2月、天皇陛下の心臓手術を執刀。著書に『最新よくわかる心臓病』(誠文堂新光社)、『一途一心、命をつなぐ』(飛鳥新社)、『熱く生きる 赤本覚悟を持って編』、『熱く生きる 青本 道を究めろ編』(セブン&アイ出版)など。 \* \*

◆本を出版して

こんにちは。天野篤です。現在、順天堂大学病院で働いて15年目になりますが、私が順天堂大学病院の卒業生でもないのに教授になったことも異例なのですが、4月から病院長になりました。

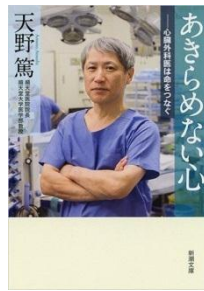
浦和



さて、今日は私の本のタイトルからかも知れませんが、『熱く生きる』というテーマでお話させていただきます。この本は、2012年に天皇陛下の心臓手術を執刀させていただきましたが、その施術についてきれいな文章で遺しておきたいということで著したものです。単行本が105万部も売れ、現在、賞味期限が切れる前ということで文庫本になっていますが、こちらも増刷になっています。

最初の印税1万部分は妻の懐に、次は福島県大熊町と双葉町から避難されていらっしゃる方々への支援金に、次は川野会長が奨学財団を設立されたというお話を伺い90万円を寄付させていただきました。その後、大島や広島での豪雨復旧のために寄付させていただいてきました。

私は高校時代の成績が60番から300番まで下がった人間で易きに走る体質ですので、印税に頼ってしまうとまじめに仕事をしなくなってしまうので印税に頼らないようにしています。



先日出した『あきらめない心: 心臓外科医は命をつなぐ』(新潮文庫)は3万部印刷したのですが、この印税は熊本地震の復旧に寄付したいと思っています。皆様が購入いただくと、一部が熊本の支援になるという本ですので、よろしくお願いたします。

\* \*

◆私の飲んでいる薬から

こちらは私の飲んでいる薬です。中性脂肪抑制のサプリメントなどが月に1万円程度、持病の薬が3種類程度です。若い頃から飲んでいた訳ではなく、20年かかってこれくらいの薬が必要になってきたのです。自分のデータを管理して身体を維持しています。



ここで申し上げたいのは「医療機関で早い時期に診察してもらい、ぜひ早く治療してください!」ということです。75~80歳のご高齢の方で元気な方に共通しているのは、ライフコーポレーションの清水信次会長も90歳ですが、「良く食べて病院が好き!」ということです。

\* \*

◆僕が医師を志したのは

私が医師を志したのは、高校を卒業して3年も浪人していたものですから、医者にでもならなければ格好がつかなかったということです。浪人中の3年間はパチンコでしたが、最後の年は頑張りました。医学部の試験を受ける時に、国立1期校と慈恵医大と日大の3校が同じ日の試験だったのですね。国立1期は相手ではない、慈恵医大は縁故がないと難しいと判断して日大に絞って受験して合格しました。

父親が心臓病で将来的には手術が必要だと言われていました。父が病弱だったために、学費を稼いでくれた母親を楽にしてあげたいという親孝行もありました。心臓外科医となって父親の手術に立ち会いましたが、残念ながら助けることができませんでした。その後、私が順天堂大学の教授になった時には母親が認知症になってしまい、私のことが分からなくなっていて親孝行ができたかは定かではありません。

今の私があるのは、父や母、大正・昭和の人たちのお陰と思い、高齢者の方々の心臓手術をライフワークとしてやっています。

息子自慢の母親に医者になって存分に自慢させた。医者になったら貧しい生活から抜け出せるかもしれないというようなこと、そして、何よりも大きかったのは、浦高出身者の底辺に沈みたくないというのが動機でした。 \* \*

## ◆外科医への憧れ「昔、今」

昔は医者というと、ベン・ケーシー、財前五郎、ブラックジャックなどでした。難病と闘う、さっそうと振る舞う、他で断られた患者さんを治療する、命を蘇らせる喜びのある仕事でした。さらに働き盛りの患者さんの命を預かる緊張と責任がありました。ですから、ひまがあったら糸結びを行い、机上の勉強よりも術野から学んで成長していました。技術は盗めと言われ、同僚は全てがライバルでした。どんな手術でも早く経験して、多く経験することが大切でした。

では、今はというと3Kです。「きつい、帰れない、給料が安い」。今テレビに出て来るのは、医龍の「浅田龍太郎」、ドクターXの「大門未知子」などで格好いい外科医像なのですが、明らかにフィクションであり現実味がありません。高齢者治療が多く、患者さん以外にも家族(いわゆるモンスターファミリー)への対応で振り回されています。

EBM(検証と根拠に基づく医療)重視の治療を行うために、ガイドラインやEBM論文の知識を身に付けておく必要があります。つまり耳学問だけでは手術ができないのです。経験だけでは専門医試験に合格しないのです。

若い人たちは、内視鏡外科、ロボット手術、血管内治療など多様化して取捨選択の必要性が出現し目標設定に悩んでいるのです。

\* \*

## ◆私は郷ひろみと同じ生年月日

実は私は郷ひろみさんと同じ生年月日なのです。

私は1977年に日本大学医学部に入学しました。しかし、入ってみると何でこんなところに入るのに3年もかかったんだと思う有様でした。〔割愛!!〕。

\* \*

## ◆医師は恩返しと医療資源の有効活用を

若い人たちが医師を目指す理由は、親や先生に勧められたから、学校の成績が医学部進学に見合っていたから、人に尊敬される、頼られる職業だから、年齢制限なく続けられそうだから、自分の身の回りの親しい人が、医学や医療の恩恵によって健康を取り戻したから、また不幸にもその当時の医学では助けられなかったからなどさまざまです。

理由はどれでも良いのですが、日本では医学生に相当の税金補助をしています。それは20代半ばで3000~8000万円の借金を背負ったようなものです。家のローンであれば30年以上の返済期間を充当させるくらいです。だから、医師は恩返しと医療資源を有効に活用する姿勢を保つ必要があります。

カナダ人のWilliam Osler(1849~1919年)という医師がいました。日本では聖路加の日野原先

生や塚本先生がOsler先生の言葉を医学教育の手本として日本に広めました。

僕は「人は人を生かすために努力して生かされる」という言葉にはっとなりました。

\* \*

## ◆心臓外科医への道

私が最初に入職した病院は症例不足、次の病院は医師不足、人手不足から大事にされて、手術は経験したがその先のこと(留学、専門研修...)というものが見えなかった。その頃に父親の2回目の手術があり、そこは何とか乗り切りました。3年半で3回目の手術が必要になり、勤務先とは違う病院での手術を選択しましたが、結果としては最悪の手術死亡となってしまいました。もし3度目の手術を5年先に伸ばすことができ、私にもっと技量があればと悔やむのですが致し方ありません。「もう失敗するなよ」という父の思いによって今の私があります。

\* \*

## ◆最近の研修医は

父親はまあまあ収入があるが裕福感はない。中高一貫入試から大学入試まで、学校外での教育費用がかかりすぎて生活が貧しく感じていた。何とか国立の医学部に入らないと親に迷惑かけっぱなし感がぬぐえない。何とか地方の国立に入学したが、カルチャーショックを受けるも、徐々に地方でエリート感に浸る。のんびりとした雰囲気慣れて、貧しくても将来はばたけるからいいか、と6年間を過ごす。先輩達の悲惨な国家試験合格率で大慌てして、また受験勉強に戻る!! 結局、研修内容よりも給料優先の病院で研修する方を選ぶというのが、現在の研修医の多くです。

\* \*

## ◆私の人生の転機

42歳の時に患者さんと運勢予想をする方から突然、「先生、このままだと大変なことになるよ。」と言われました。当時、尿管結石で死ぬほど辛い思いをしていたので、それを指摘されたかと思ったのですが、「先生、このまま行くと絶に入っちゃう。」「絶??」「私たちの世界では死よりも低い階層。跡形もないってこと。」「どうすれば、そこから抜け出せますか?」と私が尋ねると、「今よりもっと多くの人たちに役立つことをすれば階層が上がっていくよ。」「具体的には何をすれば?」「手術以外に頼まれたことや文章を書いて一度に多くの人たちに感動を与えること、なんか」「絶は嫌だから頑張ります!」と言って、それまでの行動と振る舞いを見直してみた。医師として精一杯やっていて、多忙を理由にそれまでは断っていた原稿も書き、講演も行くようにすると、これまでには見えなかったものが見えて来るのです。そして、今があります。

\* \*



## ◆人生の長さとは歩む速度

人生の速度は、10歳で時速10km、80歳では時速80kmと年をとるほど時間が過ぎるのを早く感じます。昭和40年代は人生70年でしたが、現在は人選85年です。15年も余裕を持って取り組むことができるでしょうか。また、欲望は50歳まででしょうか、その後は貢献ですね。

\* \*

## ◆大学教授へ

私は3度目の病院で新規開設後、10年間で約2400例の心臓手術を経験し、部下にも恵まれて学会発表や英語論文の作成も順調に進みました。英国から同種凍結大動脈弁を輸入して16例に移植手術を行い、先進的な医療にも参加しました。2000年～心拍下冠動脈バイパス術を本格始動。2001年に昭和大学から教授で招聘されました。

その頃に、金沢大学病院長の河崎一夫先生の『医学生へ「医学を選んだ君に問う」』という記事(朝日新聞「私の視点」2002年4月16日)を読み、その通りだと思い切り抜きを教授室に貼ってあります。< [前略]。君に問う。人前で堂々と医学を選んだ理由を言えるか? 万一「将来、経済的に社会的に恵まれそう」以外の本音の理由が想起できないなら、君はダンテの「神曲」を読破せねばならない。それが出来ないなら早々に転学すべきである。さらに問う。奉仕と犠牲の精神はあるか? 医師の仕事はテレビドラマのような格好のいいものではない。重症患者のために連夜の泊まりこみ、急患のため休日の予定の突然お取り消しなど日常茶飯事だ。死にいたる病に泣く患者の心に君は添えるか? 君に強く求める。医師の知識不足は許されない。知識不足のまま医師になると、罪のない患者を死なす。知らない病名の診断は不可能だ。知らない治療を出来るはずがない。そして自責の念がないままに「あらゆる手を尽くしましたが、残念でした」と言って恥じない。こんな医師になりたくないなら、「よく学び、よく遊び」は許されない。医学生は「よく学び、よく遊び」しかないと覚悟せねばならない。[中略]。最後に君に願う。医師の喜びは二つある。その1は自分の医療によって健康を回復した患者の喜びがすなわち医師の喜びである。その2は世のため人のために役立つ医学的発見の喜びである。その1の喜びは医師として当然の心構えである。これのみで満足せず、その2の喜びもぜひ体験したいという強い意志を培って欲しい。心の真の平安をもたらすのは、富でも名声でも地位でもなく、人のため世のために役立つ何かを成し遂げたと思える時なのだ。>

自分の求めていた医療への姿勢はこれでした。



\* \*

## ◆順天堂大学に赴任して

教授なんだから、臨床・教育・研究の3本柱をしっかり、若手の医局員を導こう、講演や執筆に…と考えましたが、2か月で無理と気付きました。結局はしっかりと数多くの手術をすることが大切で、他は得意な人材を育成する方針に転換しました。

約4000例の手術を執刀。死亡率は予定手術で0.4%、緊急手術を加えて約2%。2012年2月18日に天皇陛下の心拍動下冠動脈バイパス術を執刀しました。東京大学の広さと雰囲気の良いさにビックリしました。それからいろいろなことを体験し、今年4月から順天堂医院の病院長に、順天堂大学、東京大学以外を卒業した医師で初めてのことです。

\* \*

## ◆皇后様のお歌

平成25年新春歌会始の皇后陛下のお歌です。「天地(あめつち)にきざし来たれるものありて君が春野に立たす日近し」。

「天野あつし」が読み込まれているのですが、この歌から心臓リハビリテーションは、季節の変化を感じるまで続けて回復を感じることができると教えていただきました。

\* \*

## ◆プロフェッショナルを目指して

状況把握を的確に(時間・空間)して、全体を俯瞰した後ポイントを狙っていくことが出来るようにする。効率よく、無駄や惰性を最小限にして、物事がうまくはかどるように、進められる。プロフェッショナルは経験を生かして、シンプルな展開と結果を再現性良く示せる。すなわち、**プロの仕事は、「はやい・うまい・やすい」**です。

心臓手術からの早期回復を支える要素も

◆早く(早急に、素早く)

◆易く(費用負担軽減、無駄なく)

◆うまく(巧みに、美しい手術を)

この3つのどれも高いレベルにないと手術が上手とは言えない。

\* \*

## ◆今後の天野篤は・

小学1・2年生の道徳の本で「働くすがたが、かがやいている人たち」として紹介されています。ここまで来れば、後はお札の顔に…??。ライバルは『メスよ輝け』の当麻鉄彦です。(^^) ご静聴ありがとうございました。

\* \* [要点筆記メモより、文責：香田]

